

# 特別支援学校小学部の「自立活動」における音楽療法の実施と検討

和歌山大学教育学部：(研究代表)上野 智子 菅 道子 山崎由可里  
和歌山県立きのかわ支援学校：近藤 親子

## 1. 研究の趣旨

本取り組みは、「自立活動」において現場の教員と大学教員が連携しながら音楽療法の実施と検討を行うことで、「自立活動」において音楽を活用することの可能性の一端を明らかにすることを目的としている。これまで上野・菅・山崎は、音楽療法における音楽の機能が「自立活動」の内容と共通点が多いことや、音楽療法で設定される目標と「自立活動」で設定される目標が類似していることから、「自立活動」において音楽療法の考え方や技法を援用してきた音楽療法的活動を現場の教員と連携しながら実施してきた。本取り組みでは、音楽療法的ではなく音楽療法として実施する。音楽療法的活動との違いは、継続的なセッションの実施と、音楽活動ごとに集団全体と対象児一人ひとりの分析を踏まえてセッションを立案・実施していくことである。本取り組みでは、集団音楽療法を月2回のペースで7月より実施してきた。本稿では、2023年7月～1月までのセッションにおける集団内の関係性の構築と音楽活動の変化を中心に報告する。

## 2. 対象児の選出とセッションのプロセスおよび自立活動の内容項目との関連

本取り組みでは、小学部3年生の4名の児童を対象児とし、上野がセラピスト(Th)、近藤はアシスタント(As)という形で実施した。対象児の選出に関しては、近藤を中心に担任教諭で協議し、最終的に日々の様子から音楽療法を受けさせたい児童4名を決定した。4名の児童にはそれぞれ発語、気持ちのコントロール、集中力の継続、他者との関わり方等に課題がある。

上述の課題をもとに、まずインテークセッションを行い、短期的・長期的な目標を設定し、児童たちの実態にあわせたプログラム(音楽活動)を考案した。毎回、セッション後にAsと協議を行い、それぞれの立場から取り組みを振り返った。その後、Thは録画記録をもとに、児童たちのふるまい(どのように音楽するのか)や、集団の力動も含めてその場で起きている事象について発話や音楽行動を文章化して分析を行い、次のセッションのプログラムを立てる(内容についてはAsと共有し意見交換する)というサイクルで展開していった。

また、本取り組みは「自立活動」の時間に行っているため、「自立活動」の内容項目との関連についても確認した。児童によって細かな違いはあるが、集団で音楽するという活動の特性から「2. 心理的安定」(①②)、「3. 人間関係の形成」(①②③④)、「6. コミュニケーション」(①)が児童たちの課題と合致する内容項目となった。

## 3. 取り組みの経過

今年度(1月16日現在)は、2023年7月のインテークセッションから2024年1月までに、計10回のセッションが「自立活動」の時間(45分間)に行われた。ここでは、集団内の人間関係の形成と音楽活動における児童たちの変化について報告する。その際、セッションの時期を次の3期に区分する。(1)第Ⅰ期:インテーク～セッション1,(2)第Ⅱ期:セッション2～5,(3)第Ⅲ期:セッション6～9。

### (1)第I期:インテーク～セッション1

インテーク時、児童たちとThは初対面であり、少し緊張気味であったが、音楽すること自体を拒否することはなかった。しかし、児童たちは、Thと1対1で関わる形であれば即興的に楽器を鳴らすことができるが、みんなで一緒に楽器を演奏するなど、互いの音を聴き合うことや、自分の番まで待つということが困難であった。また、教室確保が困難だったためオープンスペースで実施したこともあってか、だんだん注意散漫になり、立ち歩きや、興味をもった楽器や布に執着してしまい気持ちが切り替えられないといった児童がでてきた。こうしたことから、セッション1ではパーテーションを使用した。オープンスペースのため、隣室から流れる音楽に注意が向いてしまうなど、特に気持ちの切り替えに課題のある児童には、集中の保持が難しい場面が度々あった。

### (2)第II期:セッション2～5

セッション2から、特別教室で授業しているクラスの空き教室を利用できるようになった。これにより、別室からの音や人の往来がなくなったことで児童たちが活動に向かいやすくなった。そのことで、より一層ThやAsの声掛けが入る児童とそうでない児童が明確化してきた。こうした状況に対し、集団や個々の児童の実態に合致した楽曲・楽器・活動内容の見直しを行った。

例えば、セッション2から始めたタンバリンを用いた活動では、《たいこ、たいこ、たいこ》という楽曲に合わせてタンバリンをリーダー役のAsがランダムに差し出し、児童が打つ。この時、Thは期待感を高めるような即興をするとともに、ランダムな間を作りながら弾き歌いする。児童たちは、いつ自分のところにタンバリンが差し出されるか分からないため、音楽に耳を澄ませ集中してAsを見るようになり、自然と順番を待つことができるようになった。そのうちに児童たちは、Thの歌と伴奏の強弱を聴き取れるようにもなり、ピアノに合わせて強弱をコントロールしながら太鼓を打てるようになった。

さらに、慣れてきたところでセッション5からは、児童がリーダー役に挑戦するようになった。これにより、児童たちは互いの存在を意識するようになり、ThとAsも含め参加者全員にタンバリンを向け、みんなで一緒に音楽する場をつくりだすようになっていった。児童の中には姿勢の保持や歩行が困難な者もいたが、その児童がリーダーになる時は、自ずと打ち方を加減するなど、音楽の中で他者を思いやる行動がみられるようになっていった。

### (3)第III期:セッション6～9

セッションを重ねる中で少しずつ各児童のキャラクターや児童同士の関係性が明らかになった。気持ちの切り替えに苦労していた児童は、活動に入れたり入れなかったりしていた一方で、参加者全員が零れ落ちることなく承認されることを望んだり、Thのような振る舞いをしたがることがわかってきた。そこでセッション6では、活動の見通しがもてるよう用意していた進行用紙をめくり、活動内容を読み上げてもらう役を当該児童に担ってもらったところ、その役割を全うしようとするようになり、自然と活動に入ることができるようになった。こうして当該児童が少しずつ活動に落ち着いて参加できるようになっていったことで、集団全体も音楽することに集中できるようになっていった。セッション9では楽曲に合わせて順番にベルを鳴らす合奏活動《5つの音》において、児童たちは初めて触れる楽曲にもかかわらず、Thのキューに合わせてベルを鳴らすことができた。第II期でも、ベルやトーンチャイムの合奏に挑戦することはあったが、楽器を手にとるとずっと鳴らし続けていたり、キューに合わせて鳴らすことが難しかったりした。そう考えると、

III期において児童たちは、周囲の音を聴きながらThのキューに集中できるようになっていったといえる。

#### 4. 取り組みを振り返りと今後の展望

集団音楽療法において、集団内の関係性の構築は、セラピーのプロセスにおいて重要な意味をもつ。約6か月間の継続的な取り組みにおいて、集団の関係性は空間的な調整、音楽的な調整、個々の児童の実態に応じた対応の調整によって変化していった。まず、空間的調整においては、オープンスペースから教室へという空間の変更によって活動に集中するための環境基盤が整えられることになった。その後も、音楽的な調整と関わりながら、児童の実態に応じた対応を進めていった。例えば、切り替えが難しい児童がいることから、使用する楽器を展示しておくのではなく、活動ごとに楽器を提示するようにしたほか、活動で用いる楽器の数も厳選した。こうした調整とともに、児童や集団が音や音楽、Th・Asの働きかけに注意を向けることができそうな音楽活動を模索していった。本報告で取り上げた《たいこ、たいこ、たいこ》は、応答の構造をもっており、リーダーはテンポの緩急や強弱を即興的に調整できる。児童たちは音楽に親しむうちに自然と音楽の構造、ひいては活動の構造を理解することになり、構造の理解が共有されると活動のルール(Thのピアノや歌の強弱と合わせてタンバリンを打つ、など)も共有できるようになったことで、全員で活動を楽しむことができるようになっていった。そうした過程を経て、前述したように児童たちは互いを思いやるような行動も出てくるようになった。

また、本取り組みは「自立活動」の中で実践した。本取り組みを振り返ると、児童たちの関係性を構築しながら音楽活動が展開されたことから、「3. 人間関係の形成」を主軸に、その過程の中で音楽的なコミュニケーションや一体感が「6. コミュニケーション」や「2. 情緒の安定」に派生していったといえよう。こうした児童たちの変化の過程を考察できたことは、学校での生活の様子をよく分かっており、子どもたちと信頼関係を結んでいるAsの存在が大きい。Thは、セッション時の児童たちの音楽行動や集団力動の分析から次回セッションの環境構成等も含めた案をAsに提案していたが、その際に担任教諭としてのAsの視点は大変貴重な意見であった。そしてセッションにおいても座席の配置や声掛けなど自然な形で音楽活動や参加する児童たちを支えてくれていた。また、Asも普段注意散漫で、なかなか学習に集中できない児童が音楽療法では集中して取り組んでいたことや、児童たちの音に対する感受性の豊かさ、模倣の力の高さなど、普段とは違う児童の姿を発見する場になったとのことである。

以上、本稿では約6か月間の取り組みにおける集団としての関係性の構築と音楽の関わりを中心に報告した。本取り組みは3月まで継続しており、集団の課題だけでなく、個々の児童に設定された課題も含め、音楽活動を通して現在も取り組んでいるところである。そして、こうした継続的な取り組みが実現できたのは、きのかわ支援学校の管理職、学級担任の先生方、保護者、空き教室を貸してくださった学級の先生方のご理解と支援のおかげである。感謝を申し上げるとともに、引き続き大学と特別支援学校が協働しながら「自立活動」における音楽の活用の可能性について探っていきたい。